

イエスのことば 第45回

イエスは言われた。「できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」
(マルコ 9:23)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元27年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元30年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1年余。
2. 紀元29年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約6か月間において、イエスは、異邦人の地域へ4回、旅行した。異邦人地域への4回の旅行は、**退避（リトリート）と休息の時**であったと同時に、**弟子たちの訓練**を目的とした。
3. リトリート第4回、ピリポ・カイサリアへ行ったときの出来事として特筆すべきは、ペテロの信仰告白、そして高い山（おそらくヘルモン山）での変貌の出来事であった。
4. 前々回は、変貌の出来事、前回は、山を下りながら、イエスと3人の弟子たち（ペテロ、ヤコブ、ヨハネ）との間で交わされた問答「エリヤについての教え」であった。
5. 今回は、山を下りてきて、ほかの9人の弟子たちとの合流地点に来たときの出来事である。ここは異邦人地域であるが、あるユダヤ人の父と子、そしてイエスの動向を監視する監視団がイエスを追って来ていた。

リトリート第4回ピリポ・カイサリア⑤ 信仰についての教え

マタイ 17:14~20、マルコ 9:14~29、ルカ 9:37~42

□イエスと3人の弟子たちが山を下りて、ほかの弟子たちとの合流地点に来ると、何やら騒動が起きていた（マルコ 9:14~18）

1. マルコ 9:14 さて、彼らがほかの弟子たちのところに戻ると、大勢の群衆がその弟子たちを囲んで、律法学者たちが彼らと論じ合っているのが見えた。

→「律法学者たち」とは、イエスの動向を監視する監視団。異邦人地域であるピリポ・カイサリアにまで追ってきた。監視団と9人の弟子たちが論じ合っている。そのまわりを大勢の群衆が取り囲んでいる。

2. マルコ 9:15~18 群衆はみな、すぐにイエスを見つけると非常に驚き、駆け寄って来てあいさつをした。イエスは彼らに、「あなたがたは弟子たちと何を論じ合っているのですか。」とお尋ねになった。すると群衆の一人が答えた。「先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、あなたのところに連れて来ました。その霊が息子に取りつくと、ところかまわず倒します。息子は泡を吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます。それであなたの弟子たちに、霊を追い出してくださいとお願いしたのですが、できませんでした。」

→群衆の中心人物は、口をきけなくする霊につかれた息子を持つ父親であった。その息子を連れてイエスのところに来た。目的は、口をきけなくする霊を追い出してもらうためであった。以前、イエスが口をきけなくする霊を追い出したことがあった（マタイ 12:22）。その場に彼自身が居合わせて目撃したのか、それともその評判を聞いたのか、いずれかであろう。彼は、イエスと弟子たちがピリポ・カイサリア地方へ向かったと知り、息子を連れてやって来た。会えるかどうかはわからない、しかしとにかく、行ってみよう、という気持ちであったのかもしれない。その父子に大勢の群衆がついて来たということは、この父親はかなりの有力者であった可能性がある。いずれにせよ、大勢のユダヤ人たちが大挙してピリポ・カイサリアに向かい、イエスに会いに行ったとなると、監視団の追跡を受けたとしても不思議ではない。

14節で、監視団の律法学者たちは弟子たちと「論じ合っていた」と記されている。何を論じ合っていたのか、それは、イエスがメシアであるか、そうでないか、である。弟子たちが悪霊を追い出せないのは、師であるイエスがメシアではない証拠だと、監視団は主張したのである。9人の弟子たちは、それまでに悪霊を追い出す経験は積んでいたのに、今回のケースでは、できなかった。

□イエスは、3つのステップを踏んで、その子から霊を追い出した（マルコ 9:19~27）

第一、父親とその子を群衆から引き離して自分のところに呼び寄せる。

第二、父親に個人的必要を言わせ、信仰があることを確認する。

第三、群衆が近くまで来る前に、その子から霊を追い出した。

1. マルコ 9:19~20a イエスは彼らに言われた。「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」そこで、人々はその子をイエスのもとに連れて来た。

→「不信仰な時代」、イエスをメシアと認めない不信仰な世代、イエスの公生涯のとき

のイスラエル民族のあの世代を指す。「あなたがた」とはその世代のユダヤ人たち。ここでは、監視団の律法学者たちを指す。イスラエル民族の頑なさにイエスが嘆いた。次に、イエスは、父親に向かって、子を連れて来るように言った。これは、群衆から引き離すためであった。

2. ルカ 9：42a その子が来る途中でも、悪霊は彼を倒して引きつけを起こさせた。

マルコ 9：20b～22 イエスを見ると、霊がすぐ彼に引きつけを起こさせたので、彼は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った。イエスは父親にお尋ねになった。「この子にこのようなことが起こるようになってから、どのくらいたちますか。」父親は答えた。「幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。しかし、おできになるなら、私たちをあわれんでお助けください。」

→子が連れて来られると、イエスは父親に「この子にこのようなことが起こるようになってから、どのくらいたちますか。」とお尋ねになった。これは、父親に個人的な必要を言わせるためである。

- ① イスラエルの指導者層が公式拒否するまでは、イエスの奇跡はメシアであることを示すためであったが、公式拒否のあとは、信者の個人的必要に応じるためである。
- ② 公式拒否のあとにイエスの奇跡を受けるための条件は、三つ。群衆の前ではしない。信者の個人的必要に応じる。三つ目は、奇跡を受ける人に信仰があること、である。
- ③ ここでは、三つ目の条件が欠ける。父親の発言の中に疑念を感じさせる部分がある。「もし、おできになるなら」、イエスはここから父親を信仰に導く。

マルコ 9：23～24 イエスは言われた。「できるなら、と言うのですか。信じる者にはどんなことでもできるのです。」するとすぐに、その子の父親は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

→「不信仰な私」・・・不真実な私を認め、神の前にへりくだる。しかし同時に、神は真実なお方であり、神のことばは必ず成る、と信じる。それが、信仰である。父親は、しっかりとその信仰の上に立った。

3. マルコ 9：25～27 イエスは、群衆が駆け寄って来るのを見ると、汚れた霊を叱って言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしはおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」すると霊は叫び声をあげ、その子を激しく引きつけさせて出て行った。するとその子が死んだようになったので、多くの人たちは「この子は死んでしまった」と言った。しかし、イエスが手を取って起こされると、その子は立ち上がった。

→悪霊は、その子から出て行くときに最後の悪あがきをして、その子を苦しめた。しかし、イエスが手を取って起こすと、その子は立ち上がった。何の障害も残らなかった。

ルカ 9:42b~43a イエスは汚れた霊を叱り、その子を癒やして父親に渡された。人々はみな、神の偉大さに驚嘆した。

□このあと、イエスと弟子たちは家に入った。自分たちだけになると、弟子たちはイエスに、なぜ自分たちには悪霊の追い出しができなかったのか、尋ねた（マルコ 9:28~29、マタイ 17:20）

1. マルコ 9:28~29 イエスが家に入られると、弟子たちがそっと尋ねた。「私たちが霊を追い出せなかったのは、なぜですか。」すると、イエスは言われた。「この種のもの、祈りによらなければ、何によっても追い出すことはできません。」

→弟子たちの**方法**が間違っていた。

「この種のもの」とは、「口をきけなくする霊」を指す。ユダヤ教ラビたちが行う通常悪霊の追い出しの方法【悪霊の名前を聞き出して、その名前を呼んで、出て行くように命じる】は、この種のものでは使えない。それゆえ、この種のものでできればその人はメシアであるとさえ、当時のユダヤ教ラビたちは教えていた。

また、「耳を聞こえなくする霊」なので、弟子たちが「イエスの名によって」命じても（参照 使徒 6:18、19:13）、通じなかったのであろう。

イエスは、この種の悪霊の追い出しは、祈りによらねばならないと教えた。

2. マタイ 17:20 イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことにあなたがたに言います。もし、からし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこに移れ』と言えば移ります。あなたがたにできないことは何もありません。」

→弟子たちの**信仰**が薄かった。

もし、いつもの方法で追い出せなかったら、そのときに弟子たちがすべきことは、祈ることである。それをしなかったというのは、信仰が欠けていたことを示す。

「山」とは何を指すか、諸説あるが、旧約聖書で「山」は王国を象徴する。ここでの文脈から考えられるのは、サタンの王国である。すなわち、この種の特種で強力な悪霊であっても追い出すことができる、そしてひいては、サタンとその配下の悪霊たちの国を動揺させることができるという意味である。